

『復讐 快事 駅路春鈴菜物語』 下

—— 解説と翻刻 ——

服 部 仁

解説付記

『復讐 快事 駅路春鈴菜物語』前編巻下一冊を翻刻する。本稿は、『同朋大学論叢』第五十九号（昭和六十三年十二月）に掲載した『復讐 快事 駅路春鈴菜物語』上——解説と翻刻——の続編である。前稿では、紙幅の都合で全冊掲載できなかったもので、いたしかたなく分載にした。よって、翻刻の顛末や解説、書誌、凡例は、右の拙稿を参照されたい。

なお、前稿擲筆後、本作に関して気付いたことを数点付記する。

まず、本作の画師の一人俵屋宗理について、榎崎宗重氏の『北斎論』（昭和十九年三月刊）に詳述されていることに気付いた。本作の巻上見返しの写真までも掲載されている。また飯島半十郎（虚心）氏著『葛飾北斎伝』下巻（明治二十六年九月元版刊、昭和五十三年四月複製版刊）にも、「俵屋宗理」の項に「歌川豊広と共に、岡山鳥作トヤマの駅路春鈴菜物語二冊を画く文化画年板」という記述が見える。

次に本書名が、殿村篠斎宛馬琴書簡に散見される。順に列挙する。

一、天保八年十二月一日付書簡〔天理圖書館善本叢書和書第五十三卷の二 馬琴書翰集翻刻篇〕昭和三十五年三月刊、四〇四頁)

十月廿二日出にて先便芳翰之御答拙翰十日限り飛脚便りニ差出、且同日、八犬伝九輯上帙の御評並ニ拙評等之写本百十二丁、中本鈴菜物語、一封ニいたし、並便にて差出し候間、追々ニ順着にて御入手、被御覽候半と奉存候。

二、天保八年十二月二十六日付書簡(同右、四一〇頁)

当月四日之貴翰、御細示之大封一通、十八日夕東着、則拝見仕候。是々十月廿二日大坂迄十日限り飛脚便を以差出し候一通ハ、十一月三日ニ御地へ着いたし、被成御覽候よし、同日並便にて差出し候紙包ハ延着にて、十一月廿五日ニ着いたし、八犬伝九輯上帙御評の写本並ニ鈴菜物語御入手、御厚礼之趣件々被仰示、承知仕候。

三、天保九年一月六日付書簡(木村三四吾氏編校『京大馬琴書簡集篠斎宛』昭和五十八年十二月刊、九二頁)

鈴菜物語未被成御再覽候へども、云々の品ニ付、御とめおかるべきよし被仰越、本懐之至ニ御座候。

当時、殿村篠斎は紀州和歌山に居住していた。それ故に、これらの書簡は大坂経由になっているのである。右三通の馬琴書簡によって判明することは、次の三点である。一に、天保八年十月二十二日まで馬琴は『驛路春鈴菜物語』を所持しており、同日それを篠斎の許へ送ったということ。二に、それを篠斎は、同年十一月二十五日に落筆したということ。三に、篠斎はそれを手許に留め置くことにしたということ。以上である。ただし、何故に馬琴が『驛

「路春鈴菜物語」を篠齋に送ったのか。また「云々の品に付」とあるが、一体どんな理由によって篠齋は『鈴菜物語』を手許に留め置くことにしたのか。といった肝腎な点については曖昧なままである。前者については天保八年十月二十二日付篠齋宛馬琴書簡に、後者については同年十二月四日付馬琴宛篠齋書簡に記してあるようだが、両書簡共、所在が不明であるので、今はこうした事実を指摘するに留める。それにしても天保九年一月六日付篠齋宛馬琴書簡の「云々の品に付、御とめおかるべきよし被仰越、本懐之至に御座候。」という文面からは、『路春鈴菜物語』に対する馬琴の思い入れが窺えるように思われる。即ち本作にかなりの程度、馬琴が手を入れたからであろうという推測をするのは、妄想であろうか。

鈴
菜
物
語

復讐 臥路春鈴菜物語前編巻下

東都曲亭門人 節亭琴驢述

第四種 仏座を祈て亡父の追善を修す

信濃國筑摩郡 山部の郷に。筑摩の温泉あり。天武天皇の十四年。東間の温泉に行幸あらんとて。行宮を造られよし。日本紀に見ゆ。この温泉ハ。ふるくより世に名高し。されバ宇治拾遺にも。これを載られたり。又夫木集殷富門院の歌に。涌かへり。もえてぞ思ふうき人は。つかの間の御湯か。富士のけぶりか」とよめり。今ハ山部の郷廢れて。温泉に温泉あり。蓋その余波ならん。とあるハ一オVものにいへり。さても波古辺仏九郎ハ。鷹巢山にて。不思議にも。神女と。双陸の賭して。古き鈴を得たりしが。好古のこゝろ露ばかりもあらざれば。只尋常の物に見なして珍重せず。袂の間に押入れて。ゆく／＼信濃路に赴き。筑摩の温泉ハ。諸國の良賤夥集合て。山里なれど繁花の地なれば。彼所にて一計較せば。銭を得る事もあらんかとして。やがて山部の郷に赴き。湯原なる旅店に宿を借にけれど。こゝに湯治する彼此人も。夏ハ殊さらに多けれど。今ハ秋の半にて。宿かる人もまれ也けり。かくて仏九郎ハ。夕餐をたうべ果て後。宿の焚妾浴衣もて来りて。誘給へハ一ウV湯桁ハ彼所に侍りといふ。仏九郎點頭て。帯も犢鼻褌も引ときつゝ。やをら浴衣を被がゆるに。袂の鈴から／＼と鳴しかバ。焚妾含笑て。客人ハ神職にてやおハする。春より夏の間は。祝詞を上さし。病厄を禳する旅客も多かめれど。今ハ少し遅く侍りといふに。仏九郎も呵々とうち笑ひ。さてハ幸なきにこそと回答つゝ。やゝこの鈴の事を思ひ出し。一昨より袂に入れ忘れて。



〈插画第六图〉

夥の道を來ぬるに。よくもとり落さざりけり。とひとりごち。蔽たるおのが衣服を束ねて片よすれば。袂の鈴。又からくと鳴つ。さても驚しや。汝も浴せまほしきか。とうち戯れ。焚妾に案内さして△二オ▽入湯し。且して旧の所へ立歸り。玉なす汗を拭ひ居るに。忽地隣坐敷に咳して。ゆるし給へく。と音なひながら。蒸襖を押ひらくものあり。と見れば。その人。年の齡四十あまりにて。鄙たれど人品いやしからず。仏九郎に對て。客人はやく歌り給へりといふ。その時仏九郎ハ。俄頃に旧の衣服を被て。忙しく帯を引結び。御身ハ合宿の旅客にておハするよ。まづこなたへとて。誘引バ。彼旅客ほとり近よりて対ひ坐し。おのれハ甲斐国郡内領猿橋よりハ南なる。駒橋のあなた。只半里を隔たる。大月の郷土に、渡鳥烏平と呼るゝもの也。年来持病に頭痛ありて。医療手を△二ウ▽竭せしが。験も見えず。この筑摩の湯ハ。かゝる症に相応すとて。勸るものあるをもて。去々年の夏より。既に三年が程こゝに來りて。秋の半まで逗留し。日暮に湯治すれど。快しと思ふ日も。あり、又いと悩しき日もありて。病根を抜に至らず。今ハはや故郷へ歸らんとおもふ也。この月に至りてハ。われに等しき旅客も。おのゝ歸り尽して。いと物寂しく覺しが。其許ハいと後れて湯治し給ふよ。一河の流を汲ミ。一樹の蔭に。宿をもるともにする事。ミな是他生の縁也とぞ。厭ひ給はずハ。今霄語あかすべし。そも何国の人にて。何とか名告給ふと間に、仏九郎△三オ▽挿画第六圖、三ウ一四オ▽答て。おのれハ波古辺仏九郎と呼れて。下野国黒川に僑居せしが。彼所にも住わびて。かく旅ハすれ。病ありて。湯治せんともあらず。繁花の地なりと聞しかバ。一見の爲に立よりて候。といふ間に。烏平ハ俱したる小廝を呼て。何ハなしとも。貯の酒を温め。肴ハあるじに誂て。とくもて来よ。といそがせバ。こゝろ得果て外面へ退出。しばしありて一壺の酒に。二三種の肴を添てもて来つ。烏平やがて盃をあげ

て。頻に仏九郎に勧めば。その意をしらず。且辞し。且飲て。や、半酣に及びけり。時に烏平。仏九郎にいふやう。言忽卒にハあれど。御身の所「四ウ」持し給ふ鈴ハ。久しく家に伝へ給ふにや。しかるべくハ一覽せまましといふに。仏九郎彼鈴をとり出し。これハ故ありて。一昨鷹の巢山にて得たり。わがこの鈴を所持せしを。いかにしてか知り給ひたる。と訝めば。烏平又いふやう。御身嚮に湯に入らんとて。焚妾に誘引れ給ふとき。その鈴からくくと鳴りぬ。しかるにその声玲瓏として心耳を澄し。年来の頭痛。猛に全快するがごとし。こハやうこそあらめとて。頻に嘆賞する程に。仏九郎も又不審ミ。やがて鈴を烏平に見すれバ。うやくしげに押戴き。と見かう見ていふやう。この形はさら也。金の色も今の世の物には「五オ」あらず。究て無礼の申シ事にハあれど。もしこの鈴を給はらば。何にまれ。わが身につけたる程の物ハ進らすべし。まげて得させ給ひね。と叮嚀に乞て已ず。仏九郎。すハよき金の蔓に掘当たり。と、片頬に笑をふくミながら。頼にも肯ず。宣ふ事にハあれど。その鈴ハ。身にもかへじと思ふなり。さハいへ。打つゞき身の幸なくて。かく窶々しき旅をすなれバ。品によりて交易せまじきにもあらず。常言に。貨ハ身のさしかえとぞいふなる。そも何をもて換給ふにやといふ。烏平これを聞て。ふかく歎び。刀の間より。金にて七種を彫あげたる。小鞆を拔出し。この「五ウ」小刀ハ。宗近なり。旅なれバこの外にさせるものもなし。今この小鞆に。二十金を副て。鈴と交易いたすべし。かくてもなほ不足におぼすかハしらねど。路銀も大かたに遣ひ尽して。只廿余金ならでハなし。些ばかりの半金ハ。残しとどめて。故郷へ帰るよすがとせまほし。まげて是にて許し給へといひかけて。腹巻の財布を解て。金を数のごとく置ならべ。小鞆とゝもにさし出せば。仏九郎ハ思ひもかけず。この夥の金を見て。なじかハ心を動ざらん。直にとりも納んとしたりしが。又思ふや

う、この人。ふかく懇望こんぼうするを見れば。この鈴すずいかばかりの金かねになるべきとも思ひ入六オ▽定めたがし。もし緩やかに売らば。数百金すひやくまねに換かえといふ。花生よまゐてのなきにしもあらざめれど。あまりにねぢて。この人をとり逃し。後日に望む人なく、宝たからの山やまへ入りながら。手を空むなしくする也。そのとき臍はらを嚙かむともかひハなし。月の雲つぎと。活物うりものハはなれ際こそ肝かん要ようなれ。と肚裏はらのうちにて問答もんどうし。まづその小鞆こづかを取とつ見るに。これも又捨售すてうりにすとも。十金まね以下の物ものにハあらず。馬うまの鞆丸ふぐりきたる鈴すずを。是彼これ三十金まねに易かんにハ。さのミ不足ふそくハあらじと尋思しあんして。鳥平うへいに對がひ。この鈴すず、かねてハかばかりの物ものに換かえんとハ思おもへざりしが。ふかく懇望こんぼうし給たまふが黙止もくしがたけれバ。望のぞみに任まかせ入六オ▽進まる也。と応かへつゝ、金かねと小鞆こづかを納おさめしかバ。鳥平うへい大よに飲のみて。しからバ後證ごうぢの為也。互たがひに一輪いっりんをとりかハすべしとて。小廝こものに旅硯たびすずりをとりよし。おのれまづ一通いっとうを書写かいたて。仏九郎ぶつに与あたへしかバ。鳥平うへいも。又一通いっとうを写したて。鳥平うへいに与わたし。小夜更きよふくるまで四表よも八表やもの物語ものがたりしつ。おのゝ酔えひを竭つくして臥房ふしどに入りぬ。かくて鳥平うへいハ詰旦あけのあま。仏九郎ぶつに別わかれを告つげ。小廝こものを將きて甲斐国かひのくにへ歸かへりしかバ。仏九郎ぶつハ思おもひの外ほかなる得とくつきたり。と、ふかく飲よび。次の日湯原つぎ ひゆのはらを立出たちしが。少し栄曜えいようこゝろ出来いでて。直ただに東ひがしへとつてかへし。終つひに鎌倉かまくらに赴おもむきて。彼此をこちを遊歴ゆうれきし。淫酒いんしゆを事こととし。入七オ▽賭かけに耽かかりて。世よをおもしろく暮くす程ほどに。しバしこそありけれ。只半年ただはんねんあまり金かねハ残のこりなく遣つかひ失うひ。さて彼小鞆かのこづかを售うるとするに。その身不相みそく応おの物ものなれば。人疑うたがひてこれを買かはず。終つひに鎌倉かまくらをさへ追おれて。武蔵国むさしのくに八王子はちおうじの辺へを徘徊はいわいし。胡麻ごまの蠅ほひの隊むれに入りて。もつばら旅客たきよとを惱なやましけり。いと憎にくむべき癖者くせものなり。是ハさておき。鈴代齋すずしろま記きハ。父ちちが枉死わうしの悲かなしきに。住すまれし結ゆふ城きをさへ追おれて。暴にわかに禄ろくにはなれ。家いへを失うひ、妻つまの小柴戸こしばと。兒子せがれ液太郎えきたろう。女兒むすめ若菜わかなを將きて。若党わかたう斤平ひんぺいに郷導ちやうだんせられ。彼かれが故郷こきやうなる。武蔵国むさしのくに駒込こまごといふ所ところに赴おもむき。入七オ▽ふりたる白屋くまのやを購あはひて。主従しゆじゆ五人ごにん膝ひざを容いれ。さて液太夫えきたうが追つ

善の仏事懇に執行ひ。嬾き月日を送りけり。されば常言に。坐して食へば山もむなしといへり。浪人していまだい程もあらねば。貯禄ハ尽きども。人恒の産なければ恒のころなし。何をがなして。衣食の料に宛はやと議するに。さすがに。武士を捨。商人となりくだらんは朽をし。小柴戸が父ハ。山城国深艸の郷土なり。父母世にありしときハ。小柴戸も彼所にて生育ける程に。土細工を見もなれたればとて。不斗手すさみに土人形を作り出しけるが。後にハ二人の子どもらさへ。蛤粉ハ八オVを塗丹を彩色ことをようせしかば。数多く出来つ。斤平ハこれをもて出て兌するに。この頃ハ。小児の弄にかゝるものハ稀なり。さるによつて。世の人甚賞訖し。これを受ける中買の小商人も出来にけり。よりに齋記が住るあたりを。駒込の土物店といひたるにや。今ハ野菜の間丸多ければ。土物とハ青菘。蘿蔔の類をいふとのミおもへり。その後土細工をして世を渡るもの。浅草の郷に夥出来しより。駒込には。さる細工もなくなりたるなるべし。かゝりける程に。その年も暮て。弥生のころになりつ。齋記ハ鷹巢山の事。いと怪しけれバ。ハ八オVこの春ハ彼所に赴きて。神女の社を一見し。なお麓の人に問て。虚実を撈らば。鈴を索出す。よすがともなるべしとて。もつぱらその準備するに。小柴戸が心持あしとてうち臥したるより。終に首あがらず。これもさすがに見捨がたくて。心の外に夏を過し。秋の半に至りて。父液太夫が一周忌を吊ころより。小柴戸も既に快氣に赴きて。やうやくに臥房を出たれど。なほをりく頭痛して。眼上おもげにてぞありける。

第五種 鈴菜をたづねて主従甲斐へ赴くハ九オV

△挿画第七回、九ウ—十オVしかるにこの秋。甲斐より駒込のほとりに移住て。齋記が家の土人形を中買し。彼此に売ありく翁ありけり。ある日。常のごとく齋記が門に音なひて。人形をたべといふ。折しも齋記は蛤粉膠を買ん



〈插画第七图〉



とて。斤平を将て。巢鴨の郷へゆきしかバ。小柴戸は。きのふけふの南風にて。頭痛頻りに堪がたけれど。手拭をもて顛巻し。病を推て人形の敷をあらため。彼翁に兌つかハしけるに。翁ハ小柴戸をつくぐと見て。内方にハ頭痛を病給ふにや。そハ血暈の所為なるべしといふ。小柴戸答て。わが身春よりの大病にて。たえてしらざりし。頭痛さへ発り侍り。ハ十ウVけふハ殊さらに頭も重やかなれど。夫も斤平も巢鴨へとて行たるに。家にハ幼きものあれバ。うちも臥れずといふ。翁聞て。その頭痛にハ。奇妙なる咒あり。僕が故郷ハ。甲斐国駒橋のほとりなるが。其所より半里ばかり南なる。大月の郷土に渡鳥烏平と呼る人。微妙鈴をもてり。もし一トたびこの鈴の音を聞ときハ。年久しき頭痛なりとも。即効あること。拭て除がごとし。さるによつて。近在郷の老弱。縁を求め。媒によりて。渡鳥の家に到り。彼鈴の音を聞て。頭痛の根を断もの多し。御身も彼所に赴きて。咒を受給ハ。生涯頭痛ハ発べからず。ハ十一オVされど近くもあらぬ彼里へ。女子の身にしてハ。輒く思ひたちがたくこそといふ。小柴戸これを聞て。小膝をすゝめ。さてハその鈴ハ。わが夫の索給ふ。五行の神鈴に疑なし。こハよき事を聞つると思ふに。胸まづうち騒げど。明白にハいはず。外々しげに。翁に對ひて。げに世にハさまぐなる咒もあるものかな。このよし。夫にも物がたり。近きに索ゆかまほし。よく教てたべといひかけて。忙しく硯を引よし。翁がいふまゝに。烏平が本貫。名氏に至るまで。審に書つけしかバ。翁ハ人形を扛擔つゝ外面へ出去けり。浩所に齋記ハ。斤平を将て巢鴨より立かへるに。ハ十一ウV液太郎。若菜ハ。門方に遊び居て。爹さま帰り給ひたるか。いと遅かりしとて。後方に跟て。もろともに裡に入りぬ。そのとき小柴戸ハ。夫のほとりに居よりて。只今翁がいひつる事を。一五十物がたり。烏平が宿所を書留たる。一枚をとり出で見せけれバ。齋記ハ読もをハらずに歎ひ。これ



〈插画第八图〉

今更所編下

十五



んとすれバ。液太郎。若菜ハ。誰起さねど。母とゞもに起出て別を惜ミ。爹さま。いつ比か帰り給ハん、斤平土産を忘れなといふ。そのとき小柴戸ハ。涙を押しひつゝ。門方まで送付。まうすまで八十三ウにハ侍らねど。彼烏平とやらん。魔術などに長たる剛盜ならバ侮がたき敵にこそ。彼所へ赴き給ハゞ。潜にその為体を問定め給へかし。勇のミが武士にハあらじ。心ざまハ爹々に似て。物のおそろしといふ事を。露ばかりもしり給ハねバ。思ひやりのミせらるゝなり。こゝへ住居して後ハ。一夜さも只ひとり。あかせし事のなきものを。狎も馴染ぬこの里に。稚きものと諸ともに。侍わぶる心ぼそさを。察し給へ。といひかけて。袂を顔におし当れば。齋記もしばし見かへりて。そハいハるゝまでもなし。われおのづから謀あり。かならず思ひ屈し給ふな。聽てめでたく帰るべし。御身よく保養し給へ。液太郎も若菜も。大人八十四オ／＼挿画第八圖、十四ウー十五オ／＼やかに母につかへよ。子どもに怪我なざし給ひそ。と是彼に聞えおき。主従いそしく別去る。折しもあれ。森をはなるゝ鳥の声も。物思へばか小柴戸が。耳にさわりに聳しく。心にかゝる明がたの。雲のゆくへを瞻つゝ。目送り見かへる首途ハ。夫婦親子が今生の別とハしらざりし。あハれ墓なき世の中なり。

第六種 茸霜を出て勇敢を示す

鈴代齋記ハ。その日斤平を將て駒込を旅だち。小石川を過りて府中に至り。日野と八王子の松原をゆくゝ雄手なる道次に。病臥たる旅客ありけり。此わたりハ。人家遠く。道ゆく八十五ウ／＼人も稀なれば。さすがに見すてがたくて。主従さまゞに勤り。齋したる薬を飲し。石澗を掬て。沃ぎ入れなどせしかバ。その人やうやくに甦生たり。さて何国のものぞと問バ。答ていふやう。おのれハ。下総の濟我より。甲斐の韭崎へ赴くもの也。もし各位の憐を

蒙らずバ。ほとくこの野の露と消なん。寔に命の親なり。と思ひ奉るにこそ。さて殿たちハ。何国へ赴き給ふにやといふに。齋記答て。吾儕ハ甲斐の大月へ。急の事ありてゆくもの也。其許にも速に快氣し給ひて。いと歎し。心いそしけれバ。且くも躊躇しがたし。緩やかに保養して。後より来給へといひ果て。主従駒木野の八十六オカたへ走り去りぬ。この時。日もや、山の袂に没らんとせしかバ。齋記ハ。斤平をいそがして。黄昏ころに駒木野に到り。その夜は。こゝに歇りて。詰巨星を戴て立出。小仏麓なる。茶店に憩ひ居たる折しも。きのふ途に病臥たる旅客。そのほとりを通りつゝ。齋記主従を見て小もどりし。小腰を折ていふやう。殿たちは。昨夜駒木野へ歇り給ひたるにや。さてもいととやくより立出給はずハ。今比こゝへ来給ハじ。きのふハ思ひもかけず。再生の恩を得て。心持常のごとくになりしかバ。心ばかりなる報をせまほしけれど。見給ふごとく窶々しく旅をすれバ。何事も思ふにまかせず。八十六ウこの小仏嶺ハ。武蔵。相模。甲斐。三国の緋にて。いと険しき山路なるに。せめて荷物を負て。けふの勞にかかり奉るべし。今宵の歌まで俱し給ハ。歎ひ思ふ所也。と信だちて。わりなく荷物の方に立よるを。斤平ハ身を盾にして。遮り留め。いな。これハ重荷にもあらぬに。かばかりの山路を頼とするに足らず。いかでか其許の肩を借に及ぶべきといふを。彼男ハ。なほ叮嚀に請て已す。齋記ハこの形勢を見て。やよ斤平。かくまでにいハるゝに。さのミ辞する事かハ。とかくその人の随意。負せといふに、固辞がたくて。荷物をこの男に負しつ。遂にこゝを立出て。小原。吉野の八十七オカ挿画第九回、十七ウ—十八オカ駒路をうち過て。関野へ至る比及ハ。午の下刻になりけり。かくて齋記ハ。午の割籠を開んとて。片白の酒。焼鮎など売家に立より。主従床几に尻をかけて待に。彼男ハ少し後れていまだ来らず。そのとき斤平ハ。齋記がほとりに居よりていふ



〈挿画第九図〉



やう。僕つらく彼男が面魂を見るに。全く旅客の模様にあらず。疑らくハこのわたりを徘徊する。胡麻蠅と呼ぶ小賊なるべし。しかるを荷物を負し給ふ事。所謂虎を養て愁を忘るゝといふ類なり。見給へ。動すれば後れていまだ来ず。何地へか逃去りけん。いと心もとなしと私語バ。齋記莞尔とうちハ十八ウ▽笑て。汝それを今しりたる歟。われハきのふ彼が道次に病臥たるとき。旅刀に不相応なる。金の小鞆を挿たるにて。癖者なりとハ猜したり。しかりといへども。彼決して脱去べからず。その欲するところ。彼行李のミならんや。わが懐中を窺ふもの也。件の鈴。もし烏平とやらんが。人の手より買とりて。その売たる人。行方しれずバ。まづ穩便に鈴を買もどして。結城ハ献り。さてその後に。事の顛末を正さんと思ひしかバ。わが貯たる程の金ハ。悉懐中して来れり。しかるを彼癖者。はやく曉得て。虚病を起し。われに介抱を受。再生の恩を得たりと信だちて。ハ十九オ▽誑りよらんとす。遮莫。這奴何程の事をかなさん。久しからずして。たち去べき也。といひも果ぬに。件の男ハ。荷物を擔入れて。片隅におろし。殿たちハ。足疾おハするかな。といひながら。手拭をもて額の汗を押拭ひ。床几の端に尻を掛たれば。斤平ハ荷物に着たる。割籠を解て。ひとつハ齋記がほとりにさしおき。彼男にも飯をわけてたうべさするに。秋なれど此わたりハ。蠅いと多くて。飯の上に群集を。斤平ハ箸もて追やらひつゝ。さてもいぶせき胡麻の蠅かな。と眩バ。彼男。箸をとめて。斤平を見かへりけり。齋記ハ是を聞て呵々とうち笑ひ。斤平ハ十九ウ▽平、汝。胡麻の蠅と名づけたる。縁故をしりたるやと問バ。斤平答て。道中の小賊を。胡麻の蠅とハ。つねにいふ事なれど。何故にこの名ありや。いまだ思ひ弁候はずといふ。齋記ハこのとき飯を食をハリしかバ。飲かけたる湯を傍にさしおき。さらバ胡麻の蠅の縁故を物がたるべし。胡麻ハその色黒きもの也。蠅も又その色黒し。蠅もし胡

麻を甜ときハ。黒きものに。黒きものゝ著ゆゑに。究て見わきがたし。されバ道中の賊が旅客を誑らんとするも。胡麻に蠅の着たるごとく。眞の旅客カ。虎落なるかを見わきがたし。こゝをもて道中の賊を胡麻の蠅△二十オ▽とハいへり。且蠅ハ糞上にも集り。碗中にも入り。その穢きこといふべからず。亦是盜賊の心ざまに似たり。且蠅の食を貪るや。追ときハ忽地飛去。手を動されバ復来たる。その羹の氣を愛てハ。熱湯に蒸れて。立地に死するを知らず。所謂賊の金錢に懸念して。首を失るゝを思ハざるがごとし。我かゝる白物にあふときハ。かならずまづ教訓し。もし用ざれば。一拳に打殺さんとおもふこと久し。さはあらぬかといふに。斤平大にうち笑ひ。寔に宣ふがごとし。物に名ること。かならず故あり。はじめて胡麻の蠅の縁故をせる。よき字問して候と回答つゝ。主従笑坪に△二十ウ▽入るといへども。彼男ハうちも笑ず。飯さへ食残して。氣色常ならず。數回嘆息せしが。思ひかねたるおもゝちにて。齋記に對ひ。やうやくにいふやう。かくしられたれば匿によしなし。古より今に至るまで。非道の金錢に目を蒐るもの。一人として刃の錆とならざるハなし。とハしりながら、浅ましくも。人の懐にこゝろを著るハ。われさへ善と思ハねど。身のよすがなきまゝに。かゝる世わたりをして候なり。推量に違はず。路銀夥所持し給ふをしりて。近よらん為に虚病を起し。こゝまで捕前来たたりし程に。謀課せしと思ひつるに。さても恐しき眼力なり。おのれ近曾。△二十一オ▽挿画第十圖、二十一ウ―二十二オ▽いくたびか物もてる旅客に跟て。虎落得たる事もあり。又手を空くして別去しこともありしが。いまだかくのごとく。智勇兼備りたる人にあはず。今胡麻の蠅の縁故を説しらして。詰り給ふ明言ハ。刀の首に臨むがごとし。はや身の暇を給ハるべし。といひ果て忙しく去らんとするを。齋記しバしと呼とゞめ。汝われに肚裏の計較を看破られ。ミづから賊也と告て退くこと。さもあ



〈挿画第十圖〉



りぬべし。しかるにわれ。小仏巖より行李を負して来りしかバ。その駄賃をあたふべし。斤平彼に錢をとらせよといへバ。斤平そのころを得て。錢三百を。ふところ△二十二ウ▽紙に押裏ミ。そのほとりにさし出せば。彼男。しバく辞してこれをとらず。齋記ハ。なほ叮嚀に教訓して。わりなく錢を収させ。又いふやう。汝も人の子ならんに。父母世にありやなしやハしらねど。もし親胞兄弟あるならば。雨の夜。風の朝。いかでか思ひ忘るべき。しかるに慾を放にして。奸智ハ人を賺に足れども。親をも身をも思ハざるハ。いと愚なることならずや。今より悪念を転し。天年を保べし。もしわが言を用ひなバ。その幸汝のミにあらず。われも一言の陰徳を施し。自他の僥倖このうへやある。と説示せば。彼男ハ感涙を押かね。錢を数回押載きて。懐に△二十三ウ▽扱めつゝ。逆るがごとく立去りしが。十歩ばかり出て。しばし見かへり。冷咲てぞ走りうせぬ。この男ハ。是別人にあらず。すなハち波古辺仏九郎なり。この仏九郎。八王子の近郷を徘徊し。もつばら旅客を杜騙て。その路銀を奪ひとりけるが。烏平が鈴と換たる小輓ハ。今に至て人終に買ず。常に旅刀に著たりしかバ。齋記ハはやく。その小輓の身に応せざる。金造なるを見て。盗賊とハ猜したり。さる程に仏九郎ハ。齋記主従が。奸計に乘らざるをもて。屈伏したるおも、ちして。彼等に心を放させ。なほ別に計較やありけん。直に五六里走り抜て。徐にこれ待たり△二十三ウ▽ける。

第七種 芹を踏で水沢に銚鏡を飛す

そのとき齋記ハ。仏九郎が出ゆくを見て。斤平にいへりけるは。這奴。近曾の小賊にや。その伎倆甚拙し。既にわれに看破せられて。ミづから賊也と告。彼屈伏したる気色にて。立去しかバ。今ハ心を放せよ。縦呼ぶとも。ふたゝび来たらじといふ。斤平聞て。仰さる事なれど。旅なれば心を放しがたし。けふもし。大月までゆき得ずして日を

暮さバ。猿橋のこなたに宿かりて。翌の朝。彼里へ赴き給へといふを。齋記ハよくも聞ず。△二十四オ▽やをくら床几をはなれ。よしや夜道をすれバとて。わが刀腰にあり。なでう怖るゝことやある。さらバ急といひかけて。立出れば。斤平ハ曲突の下に睡居る。響の婆々を呼び起して。茶の俵をとらせ。主に従て走りつゝ。又ゆくこと四五里にして。小西の宿のこなたなる。松蔭の出茶屋に憩て。主従二三碗の茶を喫しつ。齋記ハ茶店のあるじに對て。こゝより大月までハ。いくばくの道かある。暮ぬ間に。ゆかるべきかと問バ。主人答て。小西より猿橋へ一里にハ遠し。猿橋より駒橋へ十六町。駒橋より大月へ廿余町。是彼すべて。三里にハ足らねど。この松の中杖に。△二十四ウ▽横日の落たれバ。けふもはや暮るゝに近し。しからは猿橋をわたり給ふ比ハ。人顔も見わきがたからん。おなじくハ橋のこなたに歇り給へかといふ。齋記かさねて。しかりといへども。猿橋まで行ながら。其所に歇らバ本意なき所為也。そも彼橋ハ。いかなる難所にや。縦暮たりとも。渡られぬ事ハあるべからずといふに。主人又いふやう。木曾の棧道と。甲斐の猿橋ハ。ふるくより危きためしにいへり。されバ近曾誰やらんが歌にも。水の月なほ手にうとき猿橋ハ人も梢を渡るとぞ見る、件の橋ハ。桂河の兩岸に掛たるが、長サ十一丈。桁下三十余尋。(一説に長サ二十間／幅二間ばかり云々)その△二十五オ▽兩岸ハ。屏風を建たるがごとく。切岸すべて滑にして。橋より水際へ十五六丈あまりあるべきか。杭といふもの絶てなく。左右より樹を累かけて。あやしげに造り出せり。さるによつて。渡る人。目瞶き。魂消るばかりなり。これを猿橋と名づけたるハ。先に駒橋あれバなるべし。是則意馬心猿の謂なる歟。わたる人かならず心神凶乱して。怕ざるものなし。ゆきて見たまへ。聞しにハ勝る難所なり。と物がる隙に。日もいといたう落かゝりしかバ。齋記主従ハ。忙しく茶店を立出。ゆくこと半里許にして。齋記ハ猛に



< 插画第十一回 >





〈挿画第十二図〉



腰のめぐりを搔探りつゝ。斤平にいふやう。心いそ△二十五ウ▽しまゝに。黒斗を茶店におき忘れたり。彼黒斗にハ。燧袋さへ附たるに。中途に日をくらさバ。いと便なかるべし。汝走り帰(マ)りて。とり来れといそがせバ。斤平ハうけ給ハリつ。と応も果(は)ず。別去らんとしたりしが。又立もどりていふやう。雲行も雨催ひして見え候に。暮(くれ)なバかならず。猿橋のこなたに宿かりて待給へ。聽て追つき候はん。といひかけて。忙しく走り去りしかバ。齋記ハ斤平をまちあハさん為(た)めに、急ぎもやらずねり行(ゆ)バ。果して猿橋のこなたにて日ハ暮(くれ)たり。比しも九月の上旬なれバ。月ハ宵より出(い)でながら。天結陰(そらかき曇)り。ゆく先いと暗(くら)し。されど今宵大月までもと。思(おも)ひ△二十六オ▽挿画第十一図、二十六ウー二十七オ▽定めたる事なれバ。斤平がいひつる事を用ひず。遂に猿橋にさしかゝれバ。げに茶店のあるじが物がたりに違(たが)ハ。直下バ千仞の碧潭。夜ハ闇(くら)して水音遠く流れ。巴峽月落(はけつげつらく)て。悲猿腸(ひえんはらた)を断(た)しむるも。かくやとおぼ(お)うばかりなれど。元来(もとより)勇(ゆう)き壮士(さうし)なれバ。これをす(ま)すら物(もの)ともせず。

雲霞(うんか)漠々(ばくばく) 渡(わた)ニ長梯(ながはし)
四(よ)顧(こ)山川(せんせん) 一(いち)眼(がん) 易(やす)レ迷(まよ)ひ

吟步(ぎんぽ) 詔(みこと) 令(し)レ疑(ぎ)レ入(い)レ峽(けい)
深隈(ふかゝ) 残(のこ)月(つき)断(た) 猿啼(えんてい)

と口号(くちごう)。やゝ半(なか)まで渡(わた)り来るを。仏九郎(ぶつくわう)ハ向(むか)ひの岸(きし)に埋伏(まいふく)し。聞(き)すませし種(たね)が島(しま)。火蓋(ひぶた)をきつて放(はな)すにぞ。憐(あは)れハ△二十七ウ▽べし鈴代(すずしろ)蕭(せう)記(き)。胸(むね)さかを打(う)めかれ。千尋(ちひら)の底(そこ)へ落(おち)たりける。仏九郎(ぶつくわう)ハ既(すで)にしおほせたりと笑(え)を含(こ)み。火繩(ひな)をうちふりて。さら／＼とわたり来(き)つ。屍(しかい)を搔(か)き搦(と)て。悞(あやま)つてつぼう。水底(みづそこ)へと落(お)ち。こゝろ焦(い)ちた。なほ彼此(をちち)を索(たづ)ねども。既(すで)におちいりたれバ。こゝにあるべうもあらず。浩(か)所に。草冠(くさかぶり)斤平(きんぺい)ハ。黒斗(くろたて)をとつて立(たち)かへるに。途(みち)にても暮(くれ)しかバ。焦(た)ま火(ま)を買(か)ひてふり照(て)らし。飛(と)がごとくに走(は)し来る。火光(ひかげ)にそれと猜(お)しけん。仏九郎(ぶつくわう)ハ斤平(きんぺい)を。おも

ふまゝに近よせて。はつしと打たる銚鏡に。焦火弗と打滅され。さてハ。とばかり斤平が。透し瞻る橋の上を。仏九郎ハ△二十八オ▽挿画第十二図、二十八ウー二十九オ▽木伝ふごとく。足音高く逃去りぬ。

○かくて斤平ハ。齋記が枉死によつて。烏平が家に尋ゆくことを後にし。その屍をさへ索かねて。いたづらに駒込へ立かへり。仏九郎が打かけた銚鏡の小鞆をもて。仇人の手がゝりとし。液太郎を助て。種々の忠義を竭し。遂に復讐の素懷を遂る縁田ハ。来春後編に著へし。

駅路春鈴菜物語前編卷之下終 △二十九ウ▽

作者

節亭琴驢



画工

卷端五張

歌川豊廣



卷中十三張

俵屋宗理



翰墨

鈴木武筍



削刷

田 龍二



校正

魁 蕾清友



補綴

曲亭馬琴



おのれ年来書肆の為に備れて。印行の諸雑書を騰写せり。しかれどもいまだ嘗孝問せず。こゝもて悞衍最多し。近
曾曲亭翁の校正に因て。はじめて発明する事少からず、実にわが一字の師なり。されバ翁の名利を羨のあまり。只
願著作の門人たらんと希に。久して許されず。今茲頻に景慕の誠心を告て。稍素懷を遂。彼孔堂近くして。蛙子曰
と鳴。勸孝院の爵。蒙求を囀の類にあらず。口づから聞。手をとつて。教られたる△三十ウ▽新編是なり。差夫
青蠅驢尾に附すんバ。豈ひとり千里を行んや。設田楽の狐色も。虎皮の威を借すんバ。手前味噌の譏を惹ん。素人
細工の一本釘。きいて損した例ハなし。きけバ大きく程芥子酢の。鼻をとほした牛ならで。まだ稚駒の新米作者、
一粒扱のその中へ。まづい趣向も精をうけて。ひとりゆきせぬ二巻の。草紙の後にミづから織。

丁卯季秋

節亭琴驢



△三十一才▽

雲妙間雨夜月

曲亭主人著
歌川豊廣画
全五冊

○雲妙子尼才孝行の事

○伊豆武章才切草の事

○鳴神は肝雷塚の事

▲右近日本より知す

驛路春鈴菜物語後篇 近刻

勸善常世物語全五冊

三國妖婦傳全十五冊 再版全璧

文化五年
歳次戊辰
正月吉日
發販

曲亭先生種
よまか
うさほじの
外敷とある
ふとより出板

▲よまか下らぬうま久ある神よ二勝まよ一販を二除う一ん書
うさほじのゆゑ一ろ石ま二つ一つ二さ一ろ三冊二られ一の中一本
よまかは二種一
うさほじの一身二り一り三名一号二り一小三る一べ二ん一が二れ一ゆ二め一か三妻一は二ま一ま
ふとより出板一の二関一も三自一他二あり一於三菜一よ二甚一三二の一人二の一種

江戸

神田通鍋町

和泉屋晋吉

糺町平川町三丁目

角丸屋甚助

書肆

同

柏屋半藏

同

同

同